

第7号

発行：Dream 五代塾

吹田市千里山西 5-14-17

発行責任者：理事長 川口 建

「赤心」継がん

Dream

五代塾

Godaijuku

Sinbun (新聞)

五代友厚と半田銀山

福島県桑折町 訪問記

Dream 五代塾理事長

川口 建

■昨年(2021年)10月22日半田銀山を訪れました。仙台空港からレンタカーで福島県桑折(こおり)町に向け、国道4号線を走って1時間30分弱で到着。桑折町のシンボリックな半田山(標高863m)と果樹畑が一面に広がるのかな霧囲気が漂う町です。

■桑折町は伊達氏発祥の地であり、桑折西城下の町とし栄えました。江戸時代には東北地方の二大幹線街道であった「奥州街道」から「羽州街道」が分岐する交通の要衝として「桑折宿」の賑わいが伝えられています。

江戸から明治の産業は、五代友厚経営の近代的な半田銀山と幕府から蚕種本場と認定をされるほどの全国屈指の養蚕地帯とし栄えました。しかし明治の後期ころから両者ともに衰退に転じましたが、桑畑を桃畑への転作を進め、現在では皇室・皇族へ桃を献上し、商標「献上桃の郷」として全国的にも人気があります。



半田山と桃畑(桑折町)

■到着後、半田銀山の情報収集と観光マップを入手するために役場を訪問し、商工観光推進室の課長さんから周辺観光のパンフレットの提供やアドバイスを頂き大変参考になりました。

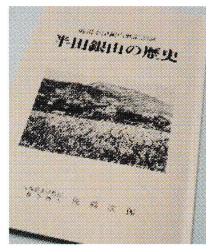
最初に旧伊達郡役所を訪問。残念ながらコロナ禍のため外観のみの見学となりました。この建物は明治16年(1883)に建



旧伊達郡役所

てられ、大正15年(1926)郡役所の制度が廃止されるまで郡行政を担ってきました。現在国の重要文化財に指定されています。2016年、この建物内で「特別展 半田銀山と五代友厚の足跡」を1月〜7月に実施されました。

同敷地内にある事務所『奥州半田銀山展記念誌 半田銀山の歴史』(元福島大学教授農学博士・佐藤次郎)68頁の小冊子を購入、大変参考になりました。(下写真)



■半田銀山は日本三大銀山として鳥根県の石見銀山、兵庫県の生野銀山と並び、日本三大銀山に数えられますが、何故世の中に知られていないのか、私は以前から不思議に思っていました。

この疑問は先の『記念誌』にも「なぜ世に喧伝(けんでん)されずに今日に及んだのかは残念でなりません」とあり、「半田銀山は稼働の時期が幕藩時代と明治中期が最盛期であり、佐渡や生野銀山に比べ休山に入った時期が早かったこと、また、鉱業史的検討を加えた論考が多くなかった」と分析されており、成ほどと納得した次第です。

さらに、半田銀山の歴史を、「第一期は発見から幕末・明治初期まで、第二期は明治7年(1874)の五代友厚〜五代家が経営した明治から大正年間、第三期はその後日本鉱業株式会社による経営時代(昭和25年(1950)休山〜閉

山)と分類することができる。ただし、第二期こそ鉱業史的に見て極めて重要な時期で、近代技術の導入による半田銀山再生の輝かしい時期でもあった」とも書かれています。

■次に目的地の中舗坑口を目指し半田沼自然公園に向かいました。半田沼周辺はハイキングコースや春には桜まつりなどの催しが行われ地元の良い場所ともなっているようです。管理事務所では坑口の場所を確認しましたが、近年の土砂崩れなどにより坑口の大半分が塞がれており、中舗坑口も雑草が茂り半分ほど塞がってしまっている状態であり、見学するのであれば少し下ったところの「二階平坑口跡」を紹介されました。



半田銀山 二階平坑口跡と筆者

■五代友厚が経営する以前の歴史を少し振り返って見ると『記念誌』には、「五代は休止状態の半田銀山の経営を始めたが、その前には悲惨な事故が発生していた。幕末の半田銀山は九抗あったが、元治元年(1864)幕府は経営不振の名のもとに直山経営を中止し、経営から手を引いた。労働者、住民らは窮状を訴え経営の継続を願ったが許されず、この惨状を見かねた地元の名士・早田傳之助がこれを救わんとし慶応3年(1867)坑業を再開した。しかし不幸なことに、明治3年(1870)6月12日坑内火災が発生し、息子らを含む14名の死を招くという悲惨な事故があり、半田銀山は事実上の休山となった」とありました。この早田家に訪問しましたが、現在は先の東日本大地震時の影響で屋敷正門の崩壊や建物の一部

が大きく傷んでおり、保存への修理がままならない状況でありました。(町指定文化財)

■明治7年(1874) 五代は休山状態であった岩代国(現福島県)の半田銀山が将来最も有望な銀山であると判断し購入しました。(なお、明治6年(1873)9月には「日本坑法」が施工され民間業者も税金を払えば自由に開坑経営ができることになった時でもある)

五代はフランス人鉱山技師ジャン・フランソワ・コアニー氏の意見を取り入れ、ドイツ式の精錬技術を導入し再開発に踏み出しました。五代とコアニーは旧知の仲でもありました。五代は、同年に東京築地入舟町に「弘成館」の出張所「東弘成館」を設置しました。

明治元年(1868) 明治政府は生野銀山を官営鉱山とし、優れた技術を取入れるためにコアニーを鉱山開発の責任者として採用しています。生野銀山は作業環境が悪く休山同様の状態であったため、明治政府はこの状況を打開するためコアニーに着目し、薩摩藩からの譲り受けを交渉し招聘が決まりました。この招聘に尽力したのが当時大阪府判事の五代友厚です。因みに、生野銀山の鉱山長は、五代と共に英国留学生として渡欧した元薩摩藩士朝倉盛明があたりました。

一方のコアニーは、2年後に再度五代の要請で半田銀山に來山し、鉱脈の分析などをしていきます。この時、コアニーは病の身で自国に帰るところ「五代さんからは是非見てくれと頼まれていたから」と、生野の人々が開いてくれた送別会

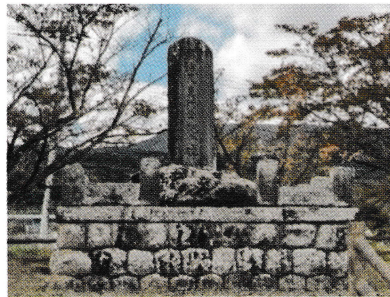


左・コアニー 右・五代龍作

の話『生野銀山建設記』に記されているそうです。

五代の鉱山経営は積極的で次々と投資と改善を進め、明治10年(1877)内閣博覧会に鉱石の出品、銀山の紹介や工場の拡張、また、各種機械の導入・増設を図り、明治15年(1882)に完成。明治17年(1884)には日本1位の産出額を達成しています。因みに、算出銀価33万円、純利益18万円(現在の価格に換算・1円=117万円とすると、各々33億円、18億円)です。

■半田銀山に明治9年(1876)6月21日に明治天皇の行幸がありました。当時の民間鉱山としては傑出した近代的な設備を整え、近代鉱山として生まれ変わらせました。地元で懸念された鉱毒や濁水対策を徹底して行い、地域の生活や学校建設のための資金提供なども行ってきました。そして鉱山開発が日本の殖産興業に貢献することを説くために、明治天皇の行幸まで成功させています。この鉱山事業の重要性は、地元にも他の鉱業者にも改めて認識されることになりました。もちろん内務卿であった大久保利通の斡旋があつて実現した想像できます。



半田銀山史跡公園内の明治天皇行幸記念碑

また、このとき同行した木戸孝允内閣顧問が天皇の意を体して祝辞を述べています。「五代友厚当鉱を開きて現今の盛況を見るに至り、国家公益のために貢献せるのみならず、これがため附近人民の幸福に寄与せることを聞き召し、深く御満足に思(おぼ)し召(たま)へる」

『盟子の祖 五代友厚小伝・八木孝昌』より

なお、当時の鉱長は吉田市十郎で、吉田は薩英戦争直後に五代が関東に潜伏した時、かくまってくれた武州熊谷の吉田六左衛門の息子(養子)で、五代が長崎にともない、そこで操鉱冶金を学ばせた経緯があります。勤王家であった吉田に「天皇行幸の案内」を務める大役で恩返ししたわけですね。

術を積極的に取り入れた。福島県でいち早く水力発電を導入し、人力に頼るほかなかった坑内の地下水の排水にポンプを導入するなど、技術革新を行い、また、半田銀山を五代家経営会社

■五代の晩年期にこの半田銀山は空前の成功を収めました。その成功は久里龍作がいたからといっても過言ではありません。

五代は下野した明治2年10月、大阪府西成郡今宮村に金銀分析所を開設しました。退官後は天下る企業があるわけでもなく、自ら起業しました。開設時には両替商の久里正三郎の別邸(現在の浪速区恵美須辺り)を譲り受け、また資金の工面も受けました。その息子(出自は紀州本宮の武士高須家の次男で叔父正三郎に乞われ養子縁組した)が久里龍作です。



五代神社の小祠の友厚・龍作公蜘蛛の巣が張りついており清掃しました

維新後五代と出会い、学生時代は五代の東京別邸から東京大学に通いました。優秀さを見込まれた龍作は国費留学生として英国に学び、帰国後は東京大学で工学の教授を務めています。

社は中心と見極め、家族とともに生活の拠点も移し、従業員と寝食をともにしながら現場で経営にあたった。資源の枯渇から、やがて半田銀山は共同経営の時代、戦中には日本鉱業の経営となり、昭和25年(1950)採鉱が中止された。このように地元への永年の功績から半田では「五代様」として小祠に祀られるまでの人物となっています。

久里龍作と半田銀山との関わりは、明治14年(1881)24歳の8月から9月半ばまで來山し視察を行い生産性を上げる種々の提言をしています。五代友厚没後は長女武子の婿として五代家・半田銀山の経営を引き継ぎました。

今回の旅行で1日半の滞在と勉強でありました、五代は当時の厳しい環境の中で、地域の活性化や住民・鉱夫の生活を第一に考えて事業に邁進したことが私の心に伝わってきました。これは現地、現場に行ってみなければ体験できないことと改めて感じた次第です。行って良かった!! 大変有意義な旅行でした。

参考書籍

- ・『半田銀山の歴史』佐藤次郎
- ・『五代友厚』桑畑正樹
- ・『開学の祖 五代友厚小伝』八木孝昌
- ・『桑折町歴史・観光パンフレット』など

五代才助 いざ世界へ 富国のために!! (下)

Dream五代塾理事長 川口 建

英国・欧州大陸の視察と 勉学のスタート

視察団はケンジントンホテルに逗留、引率者と留学生はバイズウォーター地区に6階建ての1軒を借り、薩摩16人、英語教師夫妻、家政婦の共同生活がスタートした。

その後新学期が始まり、長澤鼎を除く留学生はロンドン大学の聴講生となり勉学に励み、また、五代らと共に近代化産業の現地視察も精力的に行った。その後、大半は1年後に帰国するが、6名はアメリカに渡り、その内の一人長澤はカルフォルニアに残り、葡萄酒と呼ばれる経営者となる。

留学生たちは、鹿児島島の羽島を出発するときには不安が一杯であったが、船上や寄港地でのヨーロッパ文化に触れ、様々なカルチャーショックを経験したに違いない。

毎日の食事は肉やカレーが多く、スコッチウイスキーを飲む。デザートには夏の暑い最中にアイスクリームを食べ、コーヒーを飲み、果物はマンゴーやパイナップルを食べ、これを「松笠果物」と訳し、まさに初めてのことがかりであった。

文化の違いで、オランダ人家族が人前ではばかりずきスするのに居合わせ衝撃を受けたりもした。

近代産業としては、海水の蒸留淡水化プラントの建設、スエズ運河の工事と最新鋭の蒸気掘削機の使用。また、20車両と数車両の貨車が連結した蒸気機関車や電信の技術等など

を目のあたりにした。これらはすべてイギリスやフランスの植民地で稼働していることである。

また、根強い攘夷論者たちも、マルタの鉄壁な城砦を見たことや科学技術だけではない壮麗な寺院や美しい町並みなど、本当の西洋文化にふれて「井の中の蛙」であったことを理解したに違いない。

五代が上申書に記した「将来指導者となる人物や攘夷守旧派を連れていき、意識変革を促す」という意図はイギリスに到着する前に見事に果たされたといえる。

因みに主要都市の人口、ロンドン56万人、パリ245、ベルリン158、東京116、グラスゴー66、ハンブルグ60、リバプール51、マンチエスター51、大阪48、バーミンガム48、ブリュッセル48 (明治28年商業資料)

近代化の一端を知る (英国内)

五代は留学生の語学勉強の合間をみて留学生とともに各所の見学に出かけている。その一例を紹介する。

ロンドン市内では、800年ほど前に建てられた古城ロンドン塔。過去には造幣所が置かれていた。19世紀には蒸気を使った鑄造機械が導入されている。五代友厚が明治初めに大阪造幣寮の機械買入に尽力し、また金銀分析所を開設に大いに役立ったことは想像できる。

また、1805年に開かれたロンドン・ドックス、1828年に開かれたセント・キャサリン・ドックスを見学。またここには可動橋が4基ある。

同様に、大阪には川口運上所の近くに1873年(明治6年)に安治川橋という可動橋(旋回タイプ)が架設され「磁石橋」と呼ばれ大阪の名物にもなった。

他にはテムズ川地下を横断する全長400m

のテムズ・トンネルを見学。もとは兩岸を結ぶ鉄道を通す計画であったが、費用・技術の両面でとん挫、その後画期的な掘削技術が発明されトンネルは完成。テムズ川は蒸気船の運行が可能となった。大阪淀川も蒸気船が行きかう時代があった。

産業の近代化として、ベッドフォードの農業機械工場を見学。蒸気で動く鋤(すき)を製造しているブリタニア鉄工所。工場の広さ(1万8千坪)と建物の大きさに驚く。鹿児島集成館の工場群とはまるで規模がちがいが、集成館などは全く物の数ではないと感じたであろう。これらの農業機械はイギリス全土、ヨーロッパ各地、アメリカなどに輸出され、富国に大きく貢献していると想像したに違いない。

蒸気鋤、蒸気刈り機の説明を聞くや留学生たちは難なく運転してのけ、イギリス人たちをびつくりさせたと地方紙「ベッドフォード・タイムズ・アンド・ベッドフォード・インディペンデント」で報じられている。おそらくこの日この時、日本人が史上初めて蒸気機関の乗り物を操縦したのではないか。

また、マクルズフィールドのブルツクルハースト家の絹工場を見学。マンチエスターから南へ約30km。絹業で栄えた町で、ハースト家は絹糸紡績・絹織物業で富を築くと共に、何代にもわたって市長を務めている。工場で働く子供のために日曜学校が作られ、時に2,000人以上の子供が学んでいた。デザイン学校も創設され、学校の設立と維持にハースト家は資金援助を惜しまない企業理念があった。

長沢鼎の入学先であるアバディーンでは、蒸気船の進水式に立ち会い、グラバー商会が注文した船の進水式に英国滞在中の4人の日本人士官がこれに立ち会ったと伝えている。おそらく新納刑部、五代友厚、堀孝之、長澤鼎の4人の可能性が高い。またオルダリーエッジの銅山も見学している。このようにイギリス

ス国内をくまなく視察・見学をしているのが伺える。

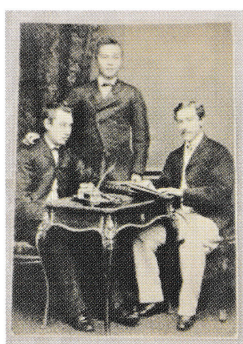
武器・近代設備を購入

新納、五代、堀はバーミンガムの兵器工場を視察とシヨルト商会を訪問し鉄砲工場見学し武器弾薬を購入している。

小銃300挺(内400挺は宇和島藩分)、騎兵銃50挺、大砲隊用小銃200挺、常短小銃200挺、短銃55挺、元込小銃12挺、双眼鏡4個、開成所の洋学・軍学書など、以上代価8,350ポンドになる。この金額は生麦事件で支払った賠償金10万ポンド・27万両に相当する。現物はグラバー商会から薩摩に直接納入、決済はジャーディン&マゼソン商会を通じて行われる。

産業機械はイギリスの世界最大の繊維機械製造会社フラット・ブラザーズ社を訪問し見学。工場はマンチエスター近郊のオールダムにある。

五代らは約3か月後に再び出向き、紡績機の正式購入契約を交わしている。購入条件で特筆するのは、薩摩での機械納入時には技師も同船し、鹿児島での据え付けと立ち上げがセットになっていることである。相次いで他



紡績機械輸入調印時 (慶応元年ロンドン) 堀孝之・五代友厚(中央)・グラバー商会ライル・ホウムズ

の技師たちも到着し総勢7名である。このイギリス技師の宿泊のために西洋風の紡績技師館(異人館・産業革命遺産)も準備した。これは日本初の洋式紡績所が誕生した事になる。技師たちは契約の2、3年を待たずして帰国している。薩摩職工の習得が早かったこともあったが、幕末の動乱

で不安を感じたのも一因の様である。しかしながら鹿児島紡績所は一貫して経営は振るわず、後に大阪の堺に工場を設け機械の一部を移設、大阪綿業の基盤を作った。五代も設立に大いにかかわっている。

五代ら欧州大陸に出発と成果

新納刑部(総責任者大目付)、五代友厚、堀孝之はイギリスでの初期の目的(視察、武器・機械類の購入)を終え、ヨーロッパ大陸に軸足を置くことになり、7月から3ヶ月余りにわたりベルギー、ドイツ、オランダを廻り、パリに滞在した。

五代は、ロンドン滞在中に知り合ったベルギー貴族モンブラン伯爵からインゲルムンシュテル城(モンブラン邸)に招かれ、新納刑部、堀孝之と訪れた。以降フランス・ベルギー・ドイツ・オランダへ視察旅行に精力的に出かけた。



モンブラン伯の居城だったインゲルムンシュテル城

五代のこれらの経済活動の中で、一つはモンブランとベルギーのブラッセルで商社設立を話し合い、1865年10月15日に12ヶ条からなる貿易商社設立の仮契約を結んだ。

鹿児島島の鉱山開発や生糸、砂糖などの特産物の独占的な輸出販売、さらに重機械の輸入・製造をする「薩・ベルギー合弁商社契約」であった。帰国後、薩摩藩でも当初は了承し本腰を入れ計画を進めようとしたが最終的には当局から賛同が得られず、また、維新激動の渦に巻き込まれ頓挫した。本邦初の「国際合弁」企業は幻となる。

また、五代の滞在中のもう一つの成果とし

て、2年後の1867年に開催される「パリ万国博覧会」の情報を得た五代は、薩摩藩独自に出展を決めた。フランス当局はモンブランと「薩摩・琉球」国「出展の総代理人とする契約を結び、以降、薩摩側の欧州政治の中心的存在となった。

一方、フランス当局は、当初パリに滞在していた幕府派遣使節の外国奉行柴田日向守に参加するよう勧めたが決断しなかった。しかし幕府は、薩摩の出展計画を聞きあわてて参加を決めたという。また、幕府が承諾したからには薩摩政府は出展におよばずと主張し、薩摩の出展を妨害しようとした。

五代はこれをガンとして拒絶し「日本は天皇の統治する国で、徳川も島津もみなその臣民である」と、幕府との共同出展を断固として断り薩摩政府としての単独出展を主張した。

更にモンブランの提案で「薩摩琉球国勲章」(下写真)を製作しフランス皇帝をはじめ政府高官らに贈呈し、薩摩藩の名を知らしめたかたちとなった。

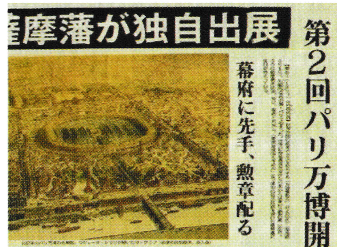
その後五代らのパリ滞在は1ヶ月にも及び、その間にベルサイユ宮殿や整地が始まった万博会場、練兵場などを見て回った。ベルギー・ドイツ・オランダでは、文化・福祉施設として古物館、動物館、木卓館、病院、女院、養院、牢獄などの視察、製造事業では製鉄、ニッケル、トタン、製紙、大砲、繊維製品、ローソク、貨幣鑄造、ビール・ブランデー、砂糖、硝子、新聞出版、電信、鉄道・・・等々、日本の近代産

業の先駆けとなる事業を目に焼き付けてきた。五代は帝國中、薩摩藩士でありながら薩摩藩庁に「献策十八箇条」を一巻にまとめ送っている。商社合力(総合商社設立)、貿易と産業の振興、紡績工場設置や蚕卵の輸出、日本での鉱山開発・精錬技術近代化などが盛り込まれていた。

備期間がそなえられていたのである。わが国の近代産業発展の跡をたずねるうえで、五代の存在も高く評価されねばならない。

関連記事(上)第3号、(中)第4号参照

参考書籍
『薩摩藩英国留学生大塚孝明』
『薩摩スチューデント、西へ』林望
『若き薩摩の群像』岡田明
『五代友厚』桑畑正樹
『新・五代友厚伝』八木孝昌 その他



幕末新聞 南日本新聞・2017年1月3日発行

五代才助 献策十八箇条 要約

- 一、ベルギーとの和親条約締結のこと
- 一、ベルギー商社を設立のこと
- 一、鹿児島で身分の高低を問わず商社開設すべきこと
- 一、商社合力でなければ大事業成り立ちがたいこと
- 一、諸大名同士が合力する商社を開くべきこと
- 一、日本において貿易を開始すること
- 一、ヨーロッパの形勢の把握
- 一、ドイツ列国に学ぶ諸大名が集まり盟約を結ぶこと
- 一、皇国の全力をもって尽くさなければ大事業成り立ちがたいこと
- 一、フランス万国博覧会へ出品すべきこと
- 一、本綿紡織事業の商社を開設すべきこと
- 一、フランス蚕卵を輸出する商社を越前に開くべきこと
- 一、ヨーロッパから土質学の達人を招聘し鹿児島で資源を探索すべきこと
- 一、罪人の死罪を免じ職を与えるべきこと
- 一、養護院を開設すべきこと
- 一、各家老の専管事項を明確化しそれに委任すべきこと
- 一、諸役人を省力化し海陸軍の専門化を図るべきこと
- 一、インド人、中国人を農業労働者として雇用すべきこと

尚、先に記したモンブランとの合弁契約に付帯して、洋式機械の輸入と資源開発に関する契約を結んでいる。その中で、動物園・川堀蒸気機関・蒸気飛脚船大型外車・大阪より京都までの蒸気車及び「テレグラフ」(電信)の4項目が挙げられている。これは日本の産業の中心は大阪であると描いていたことが興味深い。

明治18年12月に政府・工部省が廃止されるまで15か年間に同省は、造船・燈台・機械・セメント・鉄道・電信電話・製鉄・硝子・瓦斯・製紙・印刷・炭鉱山開発等の殖産興業に努め「近代国家草創期」のわが産業界に功績を残した。その源をたずねれば五代らによって準

編集後記

五代塾創始者の「久保田彌一郎先生」が講座時によく仰ったのを思い出す。一つは横井小楠の言葉を引用し「学問をいたすに(知る)と(合点)とは異なるところ御座候」、もう一つは「飛耳長目」これは鋭敏な観察力、判断力をもち見聞が広い意味という言葉です。

英国留学した若き薩摩藩留学生たちも「井の中の蛙」に陥ることなく、世界を知り、現地の空気、環境、人々と直に触れあったことで大きな財産を得たに違いない。一方、レベルは違えども今回の半田銀山訪問で五代家の苦労と功績が桑折町でいかに恩人として讃えられていることを肌で感じる事ができた。机上の知識は底の浅い情報でしかなく、日頃いかに自分が知ったかぶった言動が多いかを反省しなければならない。良い行動、良い話を何度も何度も聞いているが、それが自分の生き方に反映されていないことがいかに多いかを認識し、改めて謙虚でいる必要があると思った。久保田彌一郎先生との出会いは本当にありがたいことだった。(川口由美子記)

Dream 五代塾 HP: <https://www.dream-godai.com>
連絡先: 川口建 携帯: 080-4497-5688 Email: gogoken12345@gmail.com

